

『レ・マンダラン』における「問題小説」の側面について

伊ヶ崎 泰枝

序

1954年にゴンクール賞を受賞した『レ・マンダラン』は、戦後フランス社会における左翼知識人・作家を、ソ連強制収容所事件をめぐる彼らの動揺と懊悩を通して描きだし、左翼知識人の社会的役割と創造活動を主要テーマとした作品である。この作品については、著者の側からの否定にもかかわらず、¹⁾受賞当時、多くの批評によって問題小説であるとの指摘がなされている。例えば、この作品の思想的偏向を指摘し、プロパガンダであるとの批評がその筆頭としてあげられよう。

[*Les Mandarins* semblent] représenter, par la voie indirecte, par infiltration - peut-être après tout contre la volonté de l'auteur - un article de propagande en faveur des paracommunistes.²⁾

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品は、観念的で、主義主張が前面に出る傾向があるとされている。このような指摘はとりわけ初期作品についてなされてきたようだ。例えば冒頭に、ヘーゲルの言葉（「おのおのの意識は他の意識の死を求める」）をおいた『招かれた女』（1943）や、ドストエフスキーの言葉（「各人は全てのことについて万人に責任がある」）がエビグラフとして付された『他人の血』（1945）については、それぞれ、実存主義的哲学、あるいはレジスタンス運動への参加といった一つの読解が導かれていると考えられてきた。しかしながら、『レ・マンダラン』に対して用いられた当時のこの「問題小説」という用語はその定義があいまいなままで、いわば「政治的なイデオロギーをあつかった小説」という意味合いでやや短絡的に使用されているきらいがある。シュレイマンの定義によれば「問題小説」とは「真実らしさと描写表現の美学にもとづいたリアリスト小説であり、読者に教訓をもたらすという特徴を備え、政治的、哲学的、科学的、あるいは宗教的な主義・主張を証明する傾向にある」小説とされている。³⁾我々はこの見解にそって「問題小説」をなんらかのテーズを踏襲し、そのテーズを唯一の真理として支持、主張する小説であるとして、以下、『レ・マンダラン』にみられる「問題小説」の側面について考えてみたい。

I. 想定されるテーゼ

タイトルの「レ・マンガラン」という言葉は、中国の高官、特権的知的エリートを意味しており、左翼知識人のあり方を象徴したものとなっている。ところで『レ・マンガラン』は自伝的要素の濃い作品であり、自らも左翼知識人であったポーヴォワール自身の戦後から50年代前半にかけての思想生活・活動を反映していると一般的に考えられてきた。それでは、ポーヴォワールの当時の政治的立場、文学的主張とはどのようなものであったのだろうか。

まず、「共産党との批判的同伴—左翼知識人は共産党とともに歩まねばならない、それは党を批判しながらである」という当時（1940年代後半から50年代にかけて）の『レ・タン・モデルヌ』誌のとった方向があげられよう。⁴⁾ 実際、ポーヴォワール自身、ゴンクール賞受賞後、唯一、共産系機関紙『ユマニテ』紙のインタビューに応じて、コミュニストとの距離を認識しつつも、彼らとの連帯の必要性を次のように強調している。

En dépit de ce qui nous sépare, ils [=les critiques communistes] ont montré une compréhension qui me confirme dans les idées que j'exprimais dans mon livre : les intellectuels de gauche doivent se tenir aux côtés des communistes et travailler avec eux. ⁵⁾

また、カミュ、サルトルがそれぞれモデルと目されている、二人の主要登場人物アンリ・ペロンとロベール・デュブロイユは作家であり、当然のことながら文学は彼らの主要な関心事である。ところで、よく知られているように、45年に『レ・タン・モデルヌ』誌創刊の辞でサルトルは「アンガー・ジュマンの文学」について論を展開している。すなわち、作家は時代の中に状況づけられている以上、いかなる行為もひとつの立場をとることに他ならないとし、書く行為における作家の責任を喚起すると同時に、文学的価値の重要性をも主張しているのである。⁶⁾

『レ・マンガラン』は終戦直後を時代的背景とした作品であり、この時期に『レ・タン・モデルヌ』誌のとった二つの方向、すなわち政治的には「共産党との批判的同伴」、文学的には「アンガー・ジュマンの文学」がこの作品の中にテーゼとして措定されていると容易に想定されまいだろうか。

II. 背景—左翼知識人を取り巻く構図

ところで、これらのテーゼをめぐる背景、すなわち主要登場人物である左翼知識人、アンリ・ペロンとロベール・デュブロイユの周囲には、さまざまな政治的立場をもった登場人物たちが配置されていることに気づく。少し遠回りになるが、主人公たちを取り巻くこれらの副次的登場人物たちから考察をすすめた。

まず思い浮かぶのが元対独協力作家であるルイ・ヴォランジュである。ヴォランジュの主さいする雑誌についてランベールとアンリの間⁷⁷に次のような会話がかかわされる。

- Il s'agit d'un hebdo purement littéraire.
 - C'est ce qu'on dit toujours. Mais les types qui se déclarent apolitiques, ce sont des réactionnaires, fatalement[...]. Tu ne comprends pas que chez Volange ce mépris[=de la politique] est encore une attitude politique[...].
- (II, p.92)

このように政治的立場をもたないと主張することは、反動主義に他ならないという事実が明らかにされているのである。

ところで、この人物の否定的側面の強調は注目に値する。対独協力という過去と文壇復帰への野心、ブルジョワ階層にとりいる計算高さ、アンリの戯曲の上演の成功に嫉妬のあまり醜態を演じるといった卑俗な人格、そしてやや戯画化された純粋文学の信奉といった要素は奇妙なまとまりをもっている。この「馬鹿でそのうえ意地の悪い」⁷⁸右翼の人間は、シュレイマンの理論における、テーズに反する立場の副次的登場人物に否定的側面を積み重ねる「否定的行為項の役割」〈le rôle actantiel négatif〉⁷⁹を果たす登場人物に相当している。また、彼によって表されている反動文学は、度々主要人物たちによってその価値と質が疑問に付される他、「悪の統合」という彼の文学的スローガンに対して、モラルの面からの非難が行われている。

Le livre de Volange était une grosse mistre ; mais il avait lancé un slogan ingénieux : (Intégrer le mal.) Avoir été collabo, c'était s'être abreuvé aux fécondes sources de l'erreur[...].

(II, p.345)

一方、「レ・タン・モデルヌ」が批判的同伴をめざしたコミュニストたちに対しては、思想に部分的に共感しながらも、入党して行動することのできない党の体質が明らかにされており、「同伴」よりもむしろ「批判」の側面が強調されているのがみとれる。

まず、共産党员ラショームの盲目的信奉に対する「批判」があげられよう。この「党によって点検、訂正された現在・過去・未来の視点をたえず口にするのをやめない」(I, p.171) ラショームは、実際、アンリがソ連強制収容所の存在をエスポワール紙に発表するやいなやアンリの作品、私生活にわたる糾弾を開始するのである。

また、党员詩人ルノワールの詩の朗読会の場面には党への「批判」が戯画化された形で集約されている。

Les journaux communistes avaient annoncé la lecture de chef-d'oeuvre en quatre actes et six tableaux où Lenoir < conciliait les exigences de pureté de la poésie avec le souci de délivrer aux hommes un message largement humain > [...] La salle était comble ; l'intelligentsia communiste était rassemblée au grand complet : la vieille garde, et quantité de nouvelles recrues ; un an plus tôt beaucoup de ces néophytes dénonçaient avec indignation les erreurs et les fautes des communistes ; et puis soudain en novembre, ils avaient compris ; ils avaient compris que ça pouvait servir d'être du parti. [...] Lenoir montait sur l'estrade, il s'asseyait devant la table pendant qu'une claque disciplinée minait l'enthousiasme. (II, pp.233-235)

すなわち、大袈裟な党宣伝、党員知識人の盲従ぶり、節操のない日和見主義といった一種の戯画化が行われている。この場面の描写には、デュガスト・ポルトが指摘しているように否定的側面を語りによって積み重ねていくシュレイマンの用語「語りの冗長さ」〈les redondances narratives〉をあてはめることができよう。⁹⁾

また、このルノワールの詩については次のようにその内容が語られている。

[...]un jeune homme plaignait d'avoir du vague à l'âme ; il voulait quitter sa ville natale ; parents, maîtresses, camarades l'exhortaient à la résignation mais il déjouait les tentations bourgeoises cependant que le chœur commentait son départ en stances sibyllines. [...] Maintenant le héros se promenait à travers le monde, cherchant une évasion impossible. (II, p.236)

すなわち、ブルジョワ階級の告発という明確な目的をもった一種の宣伝文学が暗示されているのだが、この種の文学に対する輕蔑の念は主要人物たちの会話のはしばしに表れている。¹⁰⁾

以上、これらの否定的描写の積み重ねによって、¹¹⁾ 独立左翼が唯一の選択であるという図式が浮かび上がり、また、純粋文学、コミュニスト文学の否定的紹介により、芸術至上主義、宣伝文学のいずれにも陥らない主人公たちのめざす「左翼の文学」の必然性が導かれる構成になっている。したがって、背景における問題小説的側面、すなわち、テーマが唯一の真理であると主張する問題小説にしばしばみられるいくつかの手法と構図（「否定的行為項の役割」を果たす登場人物の配置や「語りの冗長さ」）を指摘することができる。それらはこの作品において読者に左翼知識人である主要登場人物たちの主義と立場への理解と共感を促す役割を果たしていると考えられよう。

III. 変容していくテーズの内容

ここでは、テーズ自体がどのように主張・証明されているかをみていきたい。本稿 I で想定した「左翼知識人の役割=共産党との批判的同伴」というテーズが、事実、作品の冒頭より、運動 S. R. L. への主人公たちの参加という形をとって措定されている。しかしながら、この「同伴」の内容は作品が展開する中で変容してくる。以下、その変遷を追っていく。

『レ・マンダラン』はバリ解放を祝うクリスマス・パーティーの場面からはじまっている。レジスタンスを体現しているとみなされた左翼に有利な解放直後の政治情勢、一種の政治的混迷期間を唯一の革命の機会ととらえ、S. R. L. は社会党と共産党との間に位置した、人民戦線のような全労働者の合同、共産党とは異なるユマニズムの確立、文化的諸価値の擁護を目指している。

Il [=Dubreuilh] reprit vivement : En tout cas, ici, en France, nous avons un but bien précis : c'est de réaliser un vrai gouvernement de Front populaire; pour ça il faut une gauche non communiste qui tienne le coup.
(I, p. 156)

また、文学については、アンリ・ベロンとロベール・デュブロイユの二人の議論の中に「左翼の文学」のイメージが次のように喚起されている。

(Supposons que vous voyez des lumières, la nuit, au bord de l'eau. C'est joli. Mais quand vous savez qu'elles éclairent des faubourgs où les gens crèvent de faim, elles perdent toute leur poésie, ce n'est plus qu'une trompe-l'oeil.[...])
- [...] Bien sûr, si on fait du merveilleux à propos de ces petites lumières en oubliant ce qu'elles signifient, on est un salaud ; mais justement : trouvez une manière d'en parler qui ne soit pas celle des esthètes de droite ; faites sentir à la fois ce qu'elles ont de joli, et la lumière des faubourgs. C'est ça que devrait se proposer une littérature de gauche[...].
(I, p. 317)

ここで述べられている「左翼の文学」が「アンガージュマンの文学」を想起させることは言うまでもないだろう。

このように小説の前半においては、われわれが本稿 I で想定したテーズがほぼそのままの形で展開されているのだが、しかしながらソ連強制収容所の発覚は、二人の主人公の立場を一変させることとなる。まず、アンリがこの事件を記事にすることによ

り、機関紙エスポワールと運動S.R.L.が分裂する。そしてこれに続く45年11月の選挙での共産党の大勝により、運動S.R.L.は解体、デュブロイユは政治から手をひく。またエスポワール紙が次第に右傾化することにより、アンリも辞職することとなる。冷戦は深刻さを増し、共産党（ソ連）の孤立化とド・ゴール派（アメリカ）との陣営の二分化がすすんでくる。主人公たちの目指していた「第三の道」はもはや不可能となり、彼らは自らの知識人としての役割を問い直さざるを得なくなり、無力感に打ちひしがれることとなる。

Robert hésita : 《Tu[=Anne] veux le fond de ma pensée?

- Evidemment.

- Un intellectuel n'a plus aucun rôle à jouer. (II, p.160)

Il[=Henri] se demandait souvent qui il était ; et voilà ce qu'on lui répondait : il était un intellectuel français grisé par la victoire de 44 et ramené par les événements à la conscience lucide de son inutilité.

(II, p.270)

文学においても、ヴォランジュの文壇への復帰に象徴される変化とともに、政治的立場をあきらかにする文学¹²⁾は文壇において勢いを失っていき、デュブロイユとアンリの二人は文学の意味をもまた問い直さざるを得なくなる。

Dubreuilh sourit aussi : 《 J'ai peut-être un peu exagéré. Après tout, la littérature n'est pas si dangereuse que ça.

- Mais vous trouvez qu'elle n'a plus aucun sens?

- Vous trouvez qu'elle en a? demanda Dubreuilh.

- Oui, puisque je continue à écrire.

- Ce n'est pas une raison. (II, p.271)

最終的には、二人の主人公は新たな雑誌の創刊を決意する。しかし、この活動の再開は当初のイデオロギー色の濃い政治活動ではもはやなく、歴史を生きるため、あるいは不正と闘うためという個人レベルの問題として位置づけられている。デュブロイユはアンリに次のように語る。

-[...] l'histoire n'est pas souriante. Mais comme il n'y a aucun moyen de lui échapper, il faut chercher la meilleure façon de la vivre : à mon avis, ce n'est pas l'abstention. (II, p.364)

したがって、テーズの内容は、イデオロギーとしての次元から個人の生き方、姿勢の次元へと変化している。大局的には、時代に対する主張の敗北、挫折の連続が描かれている中で、最終的に暗示されているデュブロイユとアンリの選択「共産党との連帯」（左翼系週刊誌の創刊、マダガスカル問題への参与等）は、唯一の真理としてではなく、絶対的確信のもてぬ選択の一つとして提示されているにすぎないものとなっている。また、「左翼の文学」も、具体的な作品としての実現に至らず、喚起されたイメージにとどまっている。

ところで、二人の活動の再開はアンヌの自殺の放棄と重ねあわされている。アンヌの、死を放棄しながらもその選択に絶対的確信の見出だせない状態と、二人の作家のまったくのゼロからのやり直しという結末は、解釈にあいまいさを残している。事実、当時の批評はここにボーヴォワールの悲観主義を読み取るのかあるいはかすかな希望を見出だすかで意見を二分した。¹³⁾ この結末のあいまいさは、『レ・マンダラン』を「問題小説」の定義からもっとも引き離している部分ではないだろうか。

結論

著者ボーヴォワールの否定にもかかわらず、『レ・マンダラン』は、『レ・タン・モデルヌ』誌の当時の政治的傾向やアンガージュマンの文学理論といった、ボーヴォワール自身の左翼知識人としての活動を彷彿させる小説前半部や、否定的な副次的作中人物たちの戯画化された描写や彼らへの批判的言及によって、確かに問題小説的側面を示している。しかしながら、テーズそのものは、主人公たちの挫折を通して、政治的レベルから個人の生き方、問題へとその重心を移しており、選択肢の一つとして提示されているにすぎないものとなっている。したがって、『レ・マンダラン』を、絶対的な真実を主張する問題小説とはみなすことはできない。¹⁴⁾ しかしながら、この問題小説的な側面によって、主要人物たちの主張、選択に対して読者が共感を覚えるような読解が導かれているもまた否定できないのである。ボーヴォワールは、このような形によって左翼知識人をめぐるいくつかの問題点、すなわち左翼知識人の役割、彼らの文学の問題を集約して読者に提示しつつも、結末をあいまいにすることによって、知識人の生き方に関する思索を読者に巧みに促しているといえよう。

注

本文および注に引用の『レ・マンダラン』を次のように略記する。

- I : *Les Mandarins* I, Sartre/ Beauvoir, *(Œuvres romanesques VII)*, Gallimard, 1979.
II : *Les Mandarins* II, Sartre/ Beauvoir, *(Œuvres romanesques IX)*, Gallimard, 1979.

- 1) (Je n'estime pas non plus que *Les Mandarins* soit un roman à thèse.)
Simone de Beauvoir, *La Force des Choses*, Gallimard, 1963, p.289.
2) *La Revue de Paris* 紙のマルセル・チエボーの記事。Björn LARSSON, *La Réception des (Mandarins)*, Sweden, Lund University Press, 1988, p.70.
3) Susan Rubin SULEIMAN, *Le Roman à thèse ou l'autorité fictive*, Presses Universitaires de France, 1983, p.14.
4) (Ils [=Lanzmann et Péju] aidèrent Sartre à repolitiser la revue [= *Les Temps modernes*] et ce furent eux surtout qui l'orientèrent vers < ce compagnonnage critique > avec les communistes que Merleau-Ponty avait abandonné.) Simone de Beauvoir, *La Force des Choses*, Gallimard, 1963, p.271.
5) *Interview de Simone de Beauvoir par J.-F. Rolland, L'Humanité Dimanche* 19 décembre 1954. Claude FRANCIS, Ferdinande GONTIER, *op. cit.*, p.358.
6) Jean-Paul SARTRE, *Présentation des Temps moderne in Situation II*, Gallimard, 1948, pp.9-30 参照。
7) (Si Robert Poulet désapprouve que ces hommes de droite soient (animés des mobiles les plus vils, et bêtes et méchants de surcroît) [...].)
Björn LARSSON, *op. cit.*, p.62.
8) Susan Rubin SULEIMAN, *op. cit.*, p.202.
9) Francine DUGAST-PORTES, *Le récit dans (Les Mandarins) in Roman 20-50 Simone de Beauvoir*, juin 1992, n°13, Presses de l'Université Charles-de-Gaulle Lille III, p.72, Susan Rubin SULEIMAN, *op. cit.*, pp.185-238.
10) たとえば, I, p.317, II, p.239参照。
11) 主要人物である左翼知識人をめぐって比較的大きな役割を果たしているこれら右翼作家とコミュニストたちの他, 作品中には無政府主義者と非合法活動家たちが描かれている。しかしながら, 無政府主義者に対しては, 詩人ジュリアンがR.P.F. (フランス人民連合) のメンバーとなることをうけて, このような思想は最終的に右翼へと接收されざるを得ないというデュブロイユの見解 (II, p.359) が述べられているにすぎない。また, 元対独協力者に対する暗殺集団の様子も描かれてはいるが, この非

合法活動についても思想活動としてではなく、戦後社会において方向を見失った若者の不安と過激さを象徴する一種の社会風俗として取り扱われている。

12) 次のような言葉で暗示されている。

〈-[...] Ce que je [=Henri] dis c'est qu'on ne peut pas les [=problèmes individuels] isoler des autres problèmes. Pour savoir qui tu [=Lambert] es et ce que tu veux faire, il faut que tu décides comment tu te situes dans le monde. 〉
(I, p. 358)

13) Björn LARSSON, *op. cit.*, pp. 85-90 参照。

14) また、人称の異なる語りの交替（アンヌの一人称、アンリの三人称のほぼ章ごとの規則的交替）がなされていることや、語り手の一人であるアンヌの恋愛がこの作品のもう一つのテーマとして大きな位置を占めていることなどやや複雑な構造をもっていることから、絶対的な語り手によってある教条を擁護する文学といった、問題小説の典型的なイメージと異なっていることを指摘しておく。

Quelques aspects caractéristiques des *Mandarins*
en relation avec la notion de roman à thèse

Yasue IKAZAKI

Les Mandarins, couronnés par le prix Goncourt en 1954, décrivent le trouble et le tourment des intellectuels de gauche après le dévoilement de l'existence des camps de travail soviétiques. Lors de la parution, nombreux étaient ceux qui ont considéré ce roman comme un «roman à thèse», sans pourtant bien préciser le sens du terme. On le définit ici, tout en consultant les théories proposées par d'autres chercheurs, comme un roman qui soutient une thèse afin de prouver qu'elle est la seule vérité, et on essaie de confronter à nouveau le texte avec cette notion.

Si on rapproche cette oeuvre autobiographique de la vie intellectuelle de Beauvoir, on voit émerger le «compagnonnage critique avec les communistes», ligne qu'adoptaient *Les Temps modernes* à partir de la fin des années quarante, et la notion de «littérature engagée» que développe Sartre dans la *Présentation* de cette revue comme thèse qui est la préoccupation dominante chez les personnages principaux à travers tout le roman.

Or, parmi de nombreux personnages présentés dans le roman, on remarque ceux qui représentent les idées politiques à leur manière, notamment un écrivain de droite, ancien collaborateur, ou un communiste fanatique, et on peut noter aussi une scène de la lecture d'un poète communiste. Leur description est marquée par la redondance négative avec la qualification en tant que personnage et avec la narration. Cette redondance, un des procédés fréquent dans le roman à thèse, sert à justifier la thèse: rester aux côtés du Parti communiste sans y adhérer et réaliser une littérature qui n'est ni de l'esthétisme ni de la propagande.

Par ailleurs, cette thèse évolue chez les héros dans le déroulement du roman. Au début, leur action revêtissait un caractère idéologique. Mais l'affaire des camps de travaux soviétiques et les échecs de leur tentative qui la suivent les amènent à remettre en question leur rôle d'intellectuel et l'efficacité de leur littérature. Leur choix final, celui de la solidarité avec les communistes, évoqué à la fin du roman, n'est qu'un de leurs choix sans conviction.

Par conséquent, *Les Mandarins* ne sont pas un roman à thèse au sens précis du terme, mais un roman qui doit faire réfléchir les lecteurs, en révélant les problèmes propres aux intellectuels de gauche.